

氏 名：小 林 恵 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 3 1 号

学位授与年月日：平成 2 0 年 3 月 1 8 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：子ども虐待事例検討会の実践による保健師の意識と支援の変化
CHANGES IN AWARENESS AND CARE PRACTICES BY
PUBLIC HEALTH NURSES THROUGH PARTICIPATION
IN AN ACTION RESEARCH-BASED CASE STUDY
GROUP ON CHILD ABUSE AND NEGLECT

論文審査委員：主査 福 島 道 子

副査 筒 井 真優美

副査 守 田 美奈子

副査 平 澤 美恵子

副査 河 口 てる子

論 文 内 容 の 要 旨

研究の背景

子ども虐待は深刻な家族病理であり、重大な社会問題である。2005年「児童福祉法」一部改正によって、子ども虐待の通告が市町村に寄せられるようになり、市町村保健師がその相談や支援を担っている。子ども虐待は家族要因、経済要因、社会的孤立などが複雑に絡み合って生じており、長期、多岐にわたる支援が必要である。そのなかにあって保健師は、支援の方向性や効果がみえず、無力感や不全感に陥っている傾向がある。そのため、子ども虐待を支援する保健師が無力感等をもつことなく、主体的に支援していくことができるような取り組みが必要である。

研究目的：

本研究の目的は、研究者がアクションリサーチの手法を用いて、子ども虐待事例検討会を保健所および市町村保健師に提案して共に実施することであり、ファシリテーターとして事例検討会に参加し、虐待事例支援上の問題を共に考えることをとおして、保健師が主体的に支援していくことができるよう働きかけることである。そして、その過程における保健師の意識と支援の変化を記述することとする。

本研究の終結点は、事例検討会参加者が同検討会の意義を実感し、自主的にその継続に向けて取り組もうとする時期である。

研究方法：

研究方法は、アクションリサーチを用いた。

研究参加者は、A保健所保健師 1 名、およびA保健所管内のB市とC町の市町保健師10名であ

った。

研究は、①事例検討会の提案、②事例検討会の企画周知と実施、③事例検討会の評価とフィードバックという手順で進めた。

データ源は、参加観察の記述と事例支援の経過報告書、会議録、個別およびグループインタビューの記録等である。データ分析は、得られたデータについて、事例検討会、研究参加者、研究者、研究参加者の職場のデータを時系列に並べ、参加者の変化、グループの変化について、研究者のアクションを関連づけながら解釈した。その後、保健師の意識と支援の変化に着目してテーマを導き、そのテーマに従って記述していった。

倫理的配慮は、研究参加者および参加者の所属長に対して、文書と口頭で研究の趣旨と倫理的配慮について説明し、承諾書を得た。事例検討会で扱う事例については、その事例から承諾を得るということは虐待という問題の性質上、困難であるため、匿名化して検討会の資料とし、かつ所属長の許可を得た範囲とした。

なお、本研究計画書は、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会に提出し承認された（2006年10月30日、承認番号研倫委第2006-50）。

結果

A. 「私の支援」から「私たちの支援」に

参加者たちは、日頃の思いを語り合うことによって、混沌としていた思いが次第に整理されていった。そして、検討場面において、事例提供者の立場に立って発言するようになり、提供された事例を「私たちの事例」としてとらえ、お互いに支援策を相談するようになっていった。

B. 「その場で止まってしまう私」から「一歩踏み出す私」へ

これまで参加者たちは、子ども虐待に関わる不安や自信のなさなどから、事例へのアプローチに足が遠のきがちであった。しかし、事例検討をとおして、参加者の力を借りながら支援の意義や方法を見いだすことができ、仲間の声に背中を押され実践するようになった。

C. 事例の「強み」への着眼

事例の問題ばかりに目が行き、支援に行き詰まっていた事例提供者であったが、事例の「強み」に着眼するように検討を行ったところ、事例の見方が変わり、できているところを認め、それを伸ばそうとする支援に変化していった。併せて、支援する保健師の「強み」をもみながら検討していった結果、お互いに敬意を表し、よく理解しようとするようになった。

D. 虐待予防の視点の乳幼児健康診査への連結

参加者たちは、乳幼児健診が子どもの発育発達のスクリーニングはできても、育児をサポートする場になり得ていないことに気づいてはいたが、その改善は難しいと感じていた。事例検討から改めて予防の重要性に気づいた参加者は、日頃の健診を振り返り、虐待予防の視点を生かすようになっていった。

E. 支援ネットワークの広がりや職場、地域への波及

このような参加者の変化は、職場や関係機関にも影響を与え、各職場で事例検討会が開始されたり、関係機関との連携も深まっていった。

考察

A. 問題解決思考から事例の「強み」への着眼

1. 問題解決思考の壁

これまで事例検討会の参加者たちは、健診や家庭訪問においても、育児上の問題をはあくして支援につなげるという問題に着眼した支援を行う傾向があった。また、子ども虐待支援においても、虐待行為を来す問題を早期に発見しそれを解決するという問題解決思考に基づく支援を行っている。しかし、そのような支援では、親が虐待を認めない事例等においては、親のストレスを高めるなどの結果をまねき、問題は浮き彫りになっても解決のための協力が得られず、たとえ解決したとしても、事例自ら問題を改善していく力をつけるという長期的な視点に立った支援は難しい。

2. 「強み」への着眼により変化した事例の見方

ファシリテーターは、「育児でできているところ、できていないところ」を整理しながら、「見方を変えれば、2日に1回の入浴でも『できているところ』に入るのではないか」など思考の枠組みの変更を促していった。結果、「不器用ながら一人で子育てを頑張っている父親」というように事例の見方が変化していった。虐待をしている親は自尊心が低く、他者から否定された扱いを受けていることが多く、「強み」に着眼することによって、親は自信や自尊心を高め、家族と信頼関係を築き、家族の能力を発展させることにつながる。

3. 参加者の「強み」に着眼した事例検討

ファシリテーターは、事例だけではなく、参加者である保健師の「強み」にも着眼することを促した。事例検討しながら「良かった支援はどんなところでしょう？」と意図して問いかけたり、適切な支援をほめることも心がけた。その結果、参加者は支援への動機が高まり、遠のきがちであった事例に向かっていくようになった。

さらに、一見、虐待とは無縁と思われる支援も変化した。たとえば保育所の調査票を虐待リスクという観点で見、支援につなげることも行われるようになった。

B. 事例検討会というグループの力

本研究で行った事例検討会は、固定した小規模のグループであること、かつ検討時間を十分確保したことにより、お互いがよく話し合うことができ、メンバー同士の相互作用を高めることができたと考える。参加者の相互作用によって一人では自信がなく躊躇していた保健師の背中を押して実践に向かわせるとともに、グループで意思決定したことによって、支援に自信をもち、関係者に主体的にケアを提案するようになった。

C. 子ども事例検討会におけるファシリテーターの働き

事例検討会においてファシリテーターは、一人ひとりの思いを傾聴し、参加者の相互作用を促すことによって、参加者の安心感や連帯感を高めた。同時に「強み」に着眼しながら気づきを促進し、一人ひとりの変化に応じたサポートをしたことによって参加者の変化を促進させたと考える。

論文審査の結果の要旨

近年、子ども虐待に関する社会的関心が高まり、保健師がその支援に苦慮している現状があり、研究テーマとして子ども虐待と保健師の活動に着目したことは、まことに今日的であり意義深い。また、本研究で行った事例検討会は、保健師の参加したいという希望を重視したものではあるが、保健所が主催する形態である。保健所と管轄する市町を説得し、かつ、研究途上、フィールドが震災や雪害にみまわれ、さらには、市町村合併で行政機関も保健師も騒然としているとき、研究者は、全体を見渡しながら粘り強く交渉を重ね、事例検討会を実現させ、継続させ、成果をあげた点は評価に値する。

「結果」に記述されているように、ファシリテーターは、事例と保健師の「強み」を意識してもらうことを柱にしながら、ときにはファシリテーターの判断を示したり、積極的に援助の適否を指摘したり、グループの力を借りながら参加者の意識と支援の変化を促し、成長を図っていった。

論文の「結果」においては、複雑に変化した現象を「『私の支援』から『私たちの支援』に」「『その場で止まってしまう私』から『一步踏み出す私』へ」「事例の『強み』への着眼」「実践につながっていった検討」というように的確に構成し、保健師が支援に行き詰まっている様子や、それを打破しようとするファシリテーターのかかわり等、いきいきと描くことができている。

「考察」においては、事例検討会において、ファシリテーターはどのような介入をしたのか、どのような変化がなぜ起こったのかについて、「結果」をふまえながら的確に考察されている。

前述のように、保健師は子ども虐待支援の役割を担いながらも、虐待する養育者から拒否されたり、期待通りに改善しなかったりするなかで無力感に陥ったり自信を失ったりしている。本研究が行った事例検討会、そこでのファシリテーターのかかわり、およびその記述は有益な実践例となると思われる。

以上から専門委員会では、本論文を学位規程第3条第3項により、博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。